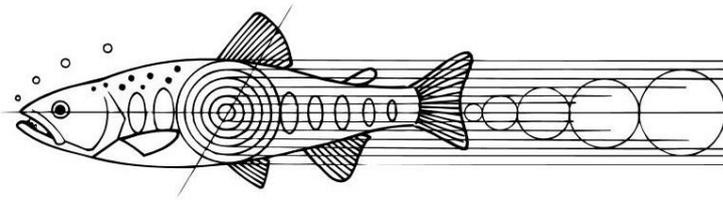


news

長良川市民学習会ニュース



秋の風物詩 瀬張り網漁



岐阜市長良古津 千鳥橋下流側



No.30

2019年10月24日

表紙：秋の風物詩 瀬張り網漁

ナマズ遊泳、鮎見当たらず・・・1

活動報告・・・2

河川工事で変貌する長良川・・・3

長良川下流域に生息するカニ類・・・6

2019 岐阜県要請行動・・・10

事務局から・・・13

参加団体紹介・ご参加ください！・・・15

長良川を放射能で汚してはならない！私たちは、原発の再稼働に反対します。

ナマズ遊泳、鮎見当たらず

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

台風 19 号で被害に遭われた方々に心よりのお見舞いを申し上げます。

2005 年に当時世界最速のコンピューター「地球シミュレーター」によって出された今世紀末の台風の予想が思い出されます。台風の発生数は 2 割程度減るものの勢力は増すというものです。世紀末を待たずして、早くも大型化しているように思えます。今回の台風では 71 河川、128 箇所ですべての堤防の決壊があったことが報道されました（CBC10 月 18 日）。多数のダムで緊急放水もなされました。ダムによる治水は限定的であることは周知の事ですが、堤防の決壊・越流が当たり前の事ようになってきたことに驚きと共に恐怖を感じます。温暖化対策が待ったなしの状態に達していると同時に、降水量の増加、豪雨の大型化に伴う対策も待ったなしの状態であることを痛感します。後者に対しては、木曾三川分流工事を成したデ・レーケに続き、オランダに学びたいものです。「河川にもっとスペースを！」と、氾濫原の復元、遊水地の確保、二次流路の創設、水制（例：信玄堤）などが進められています。用地買収など多大な経費を必要としますが、毎年多くの人命が失われ復興に莫大な費用がかかり、しかもこれが年ごとに大型化することを考えると、安いものではないでしょうか。

これに先立つ 9 月 6 日、舟に乗り長良橋から鶴飼大橋の間を見て回りました。雲は多めでも、晴れて残暑厳しい日でしたが、川の上は爽快でした。水は綺麗で、川底が見えました。鶴飼い場では鮎の食むような大きな石はなく、子砂利ばかりでした。どれだけ目を凝らしても鮎の姿は見えません。船の下を頭の大きな黒い魚が横切りました。私は何だろうと考えていると、同乗の仲間が「ナマズでしたね」と。アユもナマズも岐阜市レ



(写真) 鶴飼い大橋下流から長良橋方面（下流）を臨む。

左岸（金華山）から延びる金網に入れた石の堤。
水制工？と思わせる埋め立てを守る堤の様です。

ッドリスト準絶滅危惧種となっていますが、ナマズは泥の中のイメージ、アユの魚影を期待していただけにギャップは大きい。* 前回もお伝えした昨年 12 月の河川工事、魚たちにとって大切な淵を埋め、舟の通行を楽にする水路作りでしたが、写真の様な金網に石を入れたもので堤まで作っていました。その後、この上流で横断的に土砂がたまり、舟の往来が出来なくなったと聞いています。意味のよく分からない工事になっています。

*今は、長良川では子持ちのアユがたくさん下っています。

表紙について

「瀬張り網漁」は長良川中流域の秋の風物詩です。流れの緩やかな浅い川面を横切って支柱を立て、ロープを張り、川床に白いシートを張ります。産卵を控えてきた鮎が水面を叩くロープの音と白いシートにびっくりして止まったところを手投げ網で捕る伝統的な漁法です。天然遡上鮎が減ったため、漁協では捕った鮎から採卵し受精させ、棕櫚（シュロ）の枝につけた受精卵を河口堰の側にある人工水路まで運ぶ作業をしています。

活動報告

長良川市民学習会事務局長 武藤仁

先回ニュース発行の5月以降の活動報告をします。これらはホームページ <http://dousui.org/>でもご覧いただけます。

ニュースでお知らせした「水道民営化を考えるシンポジウム」は6月1日(土)ぎふメディアコスモスにおいて開催され約200名が参加しました。市民の関心の高さが示されました。続いて6月30日岡崎市で開催、10月1日改悪水道法施行をはさんで、12月14日(土)には「四日市の水道を考えるシンポジウム」が四日市市で計画され、地域で「命の水」を守るたたかひのネットワークが広がっています。

よみがえれ長良川実行委員会は河口堰の開門、導水路の中止をアピールするために岐阜市、名古屋市で開催されたイベントにブース出展しました。5月12日(日)「ぎふメディアコスモスみんなの森に大集合」では長良川水系で泳ぐ魚を水槽で展示し、長良川の環境に市民の関心を引きつけました。

9月14日(土)に開催された「環境デーなごや2019」もブースを覗く市民は絶えることなく盛況でした。クイズ「なごやの水と長良川」には、約200名の市民が答えてくれました。その中で「木曾川水系連絡導水路(徳山ダム導水路)をあなたは知っていますか?」という問いに対して199名中126名の市民が「全く知らない」と答えたのにはショックでした。事業凍結が10年続く中で、忘れられてしまっているようです。改めて事業の中止を訴える取り組みが求められています。

生物多様性 COP10 以来、毎年行っている「長良川下流域環境観察会」を6月9日(日)に開催しました。雨がかなり強かったのでカニの観察は中止しましたが(カニ類の状況についてはp6~9をご覧ください)、船による川底の調査と水辺観察は行いました。昨年たび重なる大洪水があったにもかかわらず河口堰下流側のヘドロは流失することもなく相変わらずでした。参加者20名のうち初参加の方も多く、木曾川の水辺では長良川で姿を消したイトメやサンカクイを観察し汽水域の生態系の豊かさに驚いていました。

5月23日(水)に「長良川河口堰の開門」、「導水路事業の中止」、「内ヶ谷ダム建設の再検討」等を求める岐阜県要請行動を行いました。要請行動の様子はp10~12をご覧ください。

要請行動では、内ヶ谷ダム問題についてはほとんど要請する時間はありませんでしたが、9月9日に開催された「岐阜県事業評価監視委員会」第4回委員会において内ヶ谷ダム建設の事業費419億円を580億円に増額することが承認されました。議論内容はまだホームページに公表されていませんが、労務費や資材費の単価アップを主な理由としているようですが、工事中に見つかった岩盤亀裂の対策工事のために68億円のコストの発生や完成が2年延長されるという重大な問題も含まれています。

元々本事業については事業者の言い分を丸呑みしても便益/費用が1.1と極めて意義の小さい事業で、私たちは事業の中止を求めてきました。岐阜県の厳しい治水関係事業費の現状の中で、このように膨らみ続けるダム建設事業にお金が消えていくことに大きな不安を感じます。

全国規模で広がった今年の大水害を見ると、堤防補強など身近な治水事業が速やかに行われることが、県民の願いではないでしょうか。

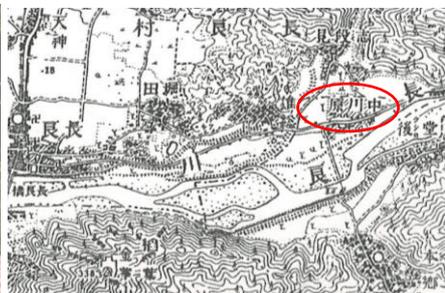
河川工事で変貌する長良川

今、長良川では、「防災・減災・国土強靱化のため」と称して、河道の浚渫や河畔林の伐採が大々的に進められています。加えて岐阜市の観光のシンボル鵜飼の鵜舟や観覧船の航路整備工事も盛んに行われています。昨年の大洪水がこれに拍車をかけているようです。長良川市民学習会には、「景観が壊されている」「動植物に影響が出るのではないのか」「アユに影響はないのか」などの心配の声が寄せられています。



● 中川原の河畔林

長良橋の上流にある鵜飼大橋右岸周辺でも、竹林や樹木などの伐開工事が始まっています。このあたりの河畔林について10月7日、地元の岐阜市中川原に74年在住する酒井寛さんからお話を伺いました。



明治29年測量地図

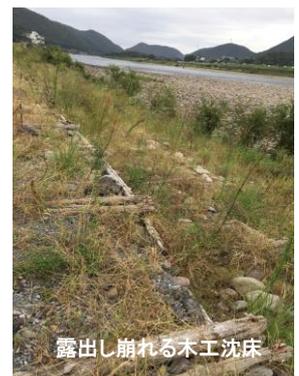
まず堤内地の銀杏の大木に囲まれた「雄ひヶ丘公園」でこの地の歴史を聞きました。

この公園内の水路が、雄総村と日野村中川原との村境だったため、雄総の「雄」と日野の「日」をとって公園名が名付けられました。この細い水路は方県郡と厚見郡の郡境であり、かつては長良川の流路であったことが偲べられます。中川原と対岸の日野と結ぶ「日野の渡し」は昭和50年代までありました。

今回の工事までの経緯

昔は今とは長良川の流れはかなり違い、低い堤防しかなかったけれど、住民は江戸時代から河川敷を入会地として畑や桑園として利用し、その畑や桑の木を守るために松や竹を植えてきたとのこと。

しかし1959年の伊勢湾台風では、濁流が低い堤防を乗り越えてきたばかりか、以後「3年連続の水害」を被ったのです。それ以前から住民は「頑丈な堤防の築造」を訴えてきていたのですが、思うように事態は進まず3年連続の水害です。そこで当時のオトナたちは話し合いを繰り返し、「頑丈な堤防を少しでも早く手に入れるには、区画整理事業を興して堤防用地を産み出し、建設省（当時）に提供することだ。区画整理事業を興せば明らかに農地の3割は減るが、3年連続の水害は、4年連続の水害になるやも知れない。子どもや孫に中川原を託すには、まず安心・安全の町にすること。それには区画整理事業を興すこと、それ以外に方法はない」との結論に達し、広い堤防用地を提供し、その上に県道の移設も行ったのです。しかし1969年に千鳥橋が出来ると、中川原付近ではそれまでと流れも変わり、南岸寄りだった流れが北岸寄りになり、建設省（当時）は、中川原の地先を多くの蛇籠を敷き詰めて守り、護岸に柳も植栽しました。



しかし1999年の出水で柳や蛇籠が流失。陳情の結果、木工沈床が施行されたので、自治会で水際に植林しようということになりました。徳山で手に入れた柳から挿し木で400本ほど苗木を作り、住民総出で植林し、下草狩りなどをしていました。洪水の際、本流が濁流でも柳が植えられた堤防側の流れは穏やかで堤防は守られていました。

ところが2017年3月に住民には連絡もなく、柳が全て伐採され、翌年の2018年の洪水で柳の側に埋まっていた木工沈床も露出し崩れています（右上写真）。そして今年7月に、コンクリートブロックで敷き詰める工事計画の開始が住民には回覧板で知らされました（右下：工事イメージ写真）。





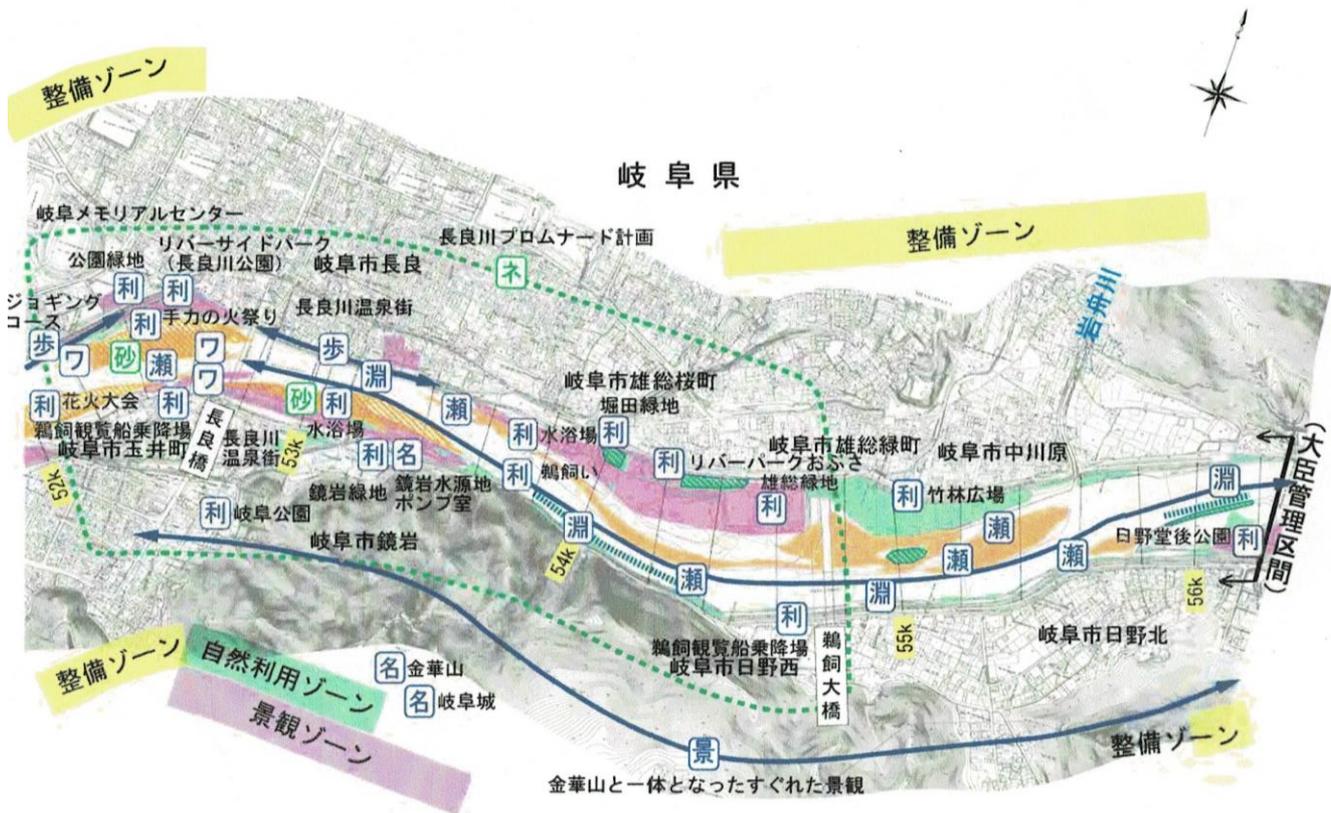
かつて住民は共有地（入会地）として堤外地を畑などで利用していましたが、維持ができなくなり地元の会社に利用権を売却したため、住民には権利はなくなっています。

現在、竹藪は岐阜市の公園に組みこまれ、竹藪を維持管理するため、「風と土の会」「竹文化振興協会」などの多くの人々が活動していることで、ヒメホタルの見事な群棲が見られたりカヤネズミが棲息したりの豊かな環境が広がっています。

工事の知らせを受け、これらの人たちは工事関係者と樹木の伐採方法などについて打ち合わせをしましたが、実際には大変広い工事用の道路ができ、残すはずの木々の多くが伐採されています。今年のヒメホタルはかなり減少し、カヤネズミの生存も心配されています。

地域住民の疑問

- ◆ 護岸になると言われる柳や竹林を伐採し、コンクリートの護岸にするのはなぜなのでしょう。
- ◆ 国土交通省の木曾川水系河川整備計画「治水」付図で、樹木伐開を行う場所となっているのは、鵜飼大橋上流では、川の中州の一部だけです。現在、伐開が進行している場所は、「環境」付図（下図）では、「竹林広場—利用」となっています。（つまり、竹林を残して「利用」する場所）「竹林広場」を伐開することは、国の河川整備計画変更にあたるのではないのでしょうか。
- ◆ この地区は長良川中流部では川幅が最も広いのに伐採工事をするのはなぜなのでしょう。金華橋（301m）、長良橋（272m）鵜飼大橋（469m）。
- ◆ 岐阜市の平成30年度の環境白書によれば、「治水対策に加え、自然環境と調和のとれた川自身が持つ力を生かした川づくりを進めていきます。」という目標を掲げ、緑の基本計画の最重点地区の一つに長良川周辺が設定されています。（岐阜市環境白書P. 40, 41）
- ◆ 1997年の河川法改正では、事業を行う際には環境に配慮し、住民の意見を聞き取ることが謳われています。環境の視点はどうなったのでしょうか。



木曾川水系河川整備計画「環境」付図より抜粋

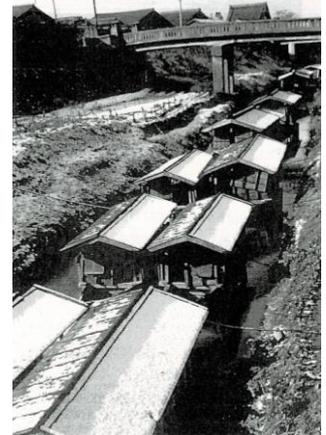
● 鵜飼観覧船係留場の工事

今年8月16日台風16号の影響で長良川が増水し、係留されていた鵜飼観覧船が4隻流失しました。これは洪水で本流を仕切る土手の一部が壊れたために起こったようです。現在は写真のように壊れた箇所は修復されています。しかし、長良川らしい景観が台無しになり、観光にとっても大きなダメージになるのではないかと思います。また、この堤外地での土盛りは河積を減らすこととなります。この長良橋付近の川幅は狭いので、治水にはとても危険なことではないでしょうか。

当会のスタッフの古い記憶から「かつては、川原町の南側を流れる忠節用水に係留していたのでは？」と観覧事務所に問い合わせたところ、長良川の河床が低くなり、20年以上前から用水には引き込めなくなっているとの回答がありました。係留の方法はいろいろ考えているが、船頭の数や技術も昔とは遙かに違うので観覧船事務所も苦慮しているとのこと。



観覧船係留場の整備のために「立派な堤防」が



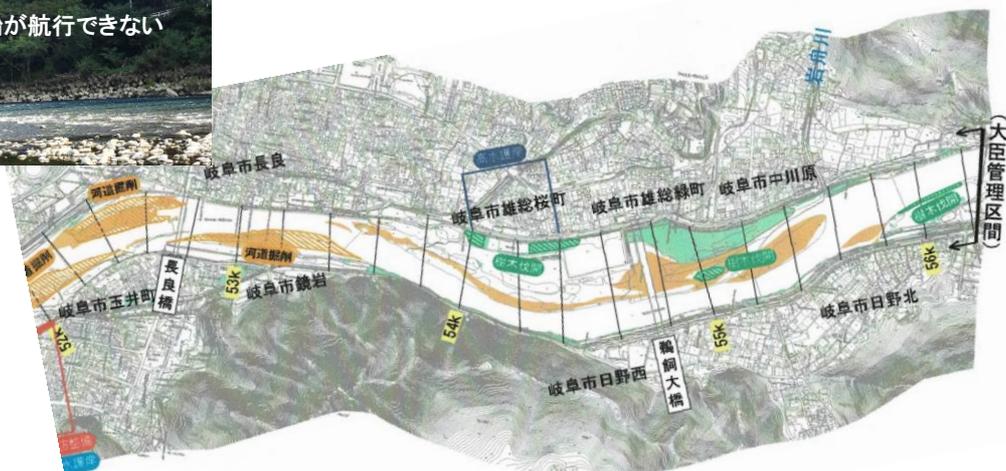
忠節用水に係留する観覧船
昭和31年撮影
「岐阜市史」資料編より

● 航路の確保工事

先回のニュースでお伝えしましたが、昨年夏の大洪水で金華山の下あたりの右岸側に大量の砂利が堆積し、流心が左岸の淵に移りました。まわし場（鵜飼の出発点）は上流の鵜飼大橋あたりにあるので、航路確保のため昨年12月堆積した砂利を浚渫し、左岸の淵を埋める工事を行いました。下の写真のとおり、今も淵の方に向かうかつての流路は黒い土囊のようなもので遮断されたままです。



ところがその後、その直上流側には広く砂利が滞積するようになり、左下の写真のように、流量が減ると河川を横断する浅い瀬となり、船が全く航行できなくなっています。何のための工事だったのでしょうか。埋められてしまった淵は、河川整備計画の中では「淵」として位置づけられ、そのまわりの河畔林は「魚付林」と位置づけられています。



木曾川水系河川整備計画「治水」付図より抜粋

長良川下流域に生息するカニ類に起きたこと

元長良川下流域生物相調査団 千藤 克彦

はじめに

長良川下流域生物相調査団は、河口堰建設事業によって急速に変化していく長良川下流域を目の当たりにして、1990年秋に結成されました。できるだけ多くの生物を今のうちに記録しておきたい、また、河口堰によって長良川の自然がどう変わるのか、自らのデータに基づいて考えてみようと思ったのです。

調査当初、カニ類の調査は計画していませんでした。しかし別の調査で下流域を訪れた時、川岸に生息するおびただしい数のカニ類に遭遇し、その多さに驚嘆しました。そしてカニ類の下流域での生態的な役割の重要性を認識して新たに調査対象に加えられました。

河口堰ができる前のベンケイガニとクロベンケイガニ

長良川下流域には8種類のカニ類が確認されています。そのうちのベンケイガニとクロベンケイガニの2種が、河口堰ができる河口から5.4km地点から上流の32km地点までの間でたくさんの個体数が確認されました。そこで、ベンケイガニとクロベンケイガニ(図1)の生息密度や産卵生態などを調査しました。

ベンケイガニとクロベンケイガニ(ベンケイガニ類とします)の生息密度調査は冬眠する晩秋から冬に行いました。ベンケイガニ類はとてすばしこくてカウントが難しいためです。1m四方の方形枠(コドラート)を土の上に置き、コドラート内の土を深さ30cmまで掘り起こしカニを全部捕まえました。この調査を、1991年10月から翌4月の間に河口よりそれぞれ13.5km左岸、18.0km左岸、24.0km右岸、28.0km左岸の4地点で1地点につき5カ所で行いました。最も密度が高いのが24.0km右岸で、平均値で91.0個体/m²でした。1m²の中におよそ100個体のカニがいるのです。低いのは28.0km左岸で5.3個体/m²でした(図2)。ただしこの数値は甲羅幅が10mm以下の個体を除外したもので、それを含めるともっと大きな値になります。

ベンケイガニ類の交尾や幼生の放出の観察も行いました。1992年の5月に17km左岸でクロベンケイガニの、6月に13km左岸でベンケイガニの交尾が観察されました。交尾は主に地表で行われていましたが、中には樹上で行うものもありました。交尾によって受精し、発生した幼生は1993年7月の大潮近くの高潮時に幼生を放出する行動が観察されました。長良川の汽水域でベンケイガニ類が命を繋いでいる様子が明らかになりました。



図1 クロベンケイガニ(上)とベンケイガニ(下)

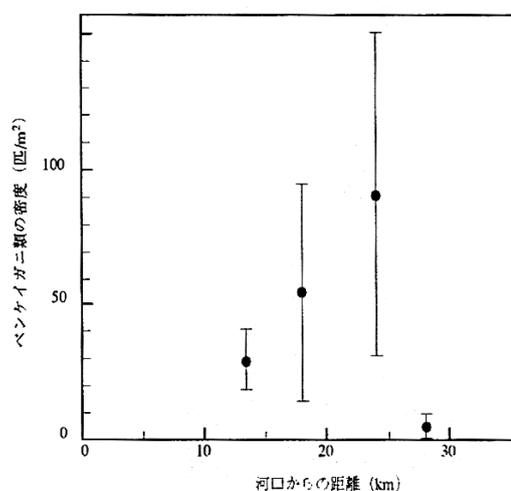


図2 河口堰運用前のベンケイガニ類の生息密度

河口堰による影響

河口堰ができると、堰より上流はこれまでの海水と淡水が混じった汽水から淡水に変わります。ベンケイガニや同じイワガニ科のアカテガニの幼生は、淡水に対する耐性が非常に低いことがわかっていました。したがって、河口堰ができると堰より上流ではベンケイガニ類は生活史を完結できなくなり、最悪の場合、堰の稼働後数年で見られなくなってしまうと予想されました。

ベンケイガニ類の成体は、かなり上流まで生息していることから淡水に順応していると予想されたので、まずいなくなるのは若い個体からだろうと予想できました。

河口堰が稼働する前の1994年9月と、稼働後3年経った1998年9月に個体数調査を行いました。稼働前の長良川や木曽川では、甲羅幅が10mm以下の個体が多く確認できました。一方、稼働後の長良川では、甲羅幅の小さな個体がいなくなっていました。

同様の結果が、建設省(現国土交通省)が行ったモニタリング調査の結果からも得られています。河口堰運用後の1995年から稚ガニが年々減少していき、1999年には、ほとんど採集されなくなりました。こうして長良川から次第に稚ガニが消失していく様子が明らかになりました(図3)。

稚ガニがいなくなっても残るベンケイガニ類

河口堰が稼働して5年後には、堰の上流ではベンケイガニ類の稚ガニが全く見られなくなりました。その一方でベンケイガニ類の成体は見ることができました。そこで、2003年に木曽川3地点、長良川8地点、揖斐川1地点で定量的な調査を行いました。2名の調査員で30分間カニの見つけ取りを行うというものです。

長良川では、木曽川や揖斐川と背割り堤をはさんで隣接する場所で比較的多くの個体が採集でき、甲羅幅が15mm以下の小さな個体も採集できました。一方、木曽川や揖斐川から離れている場所では採集個体が少なく、すべて甲羅幅が20mm以上の個体ばかりでした。2006年と2009年にも同様の調査を行いました。

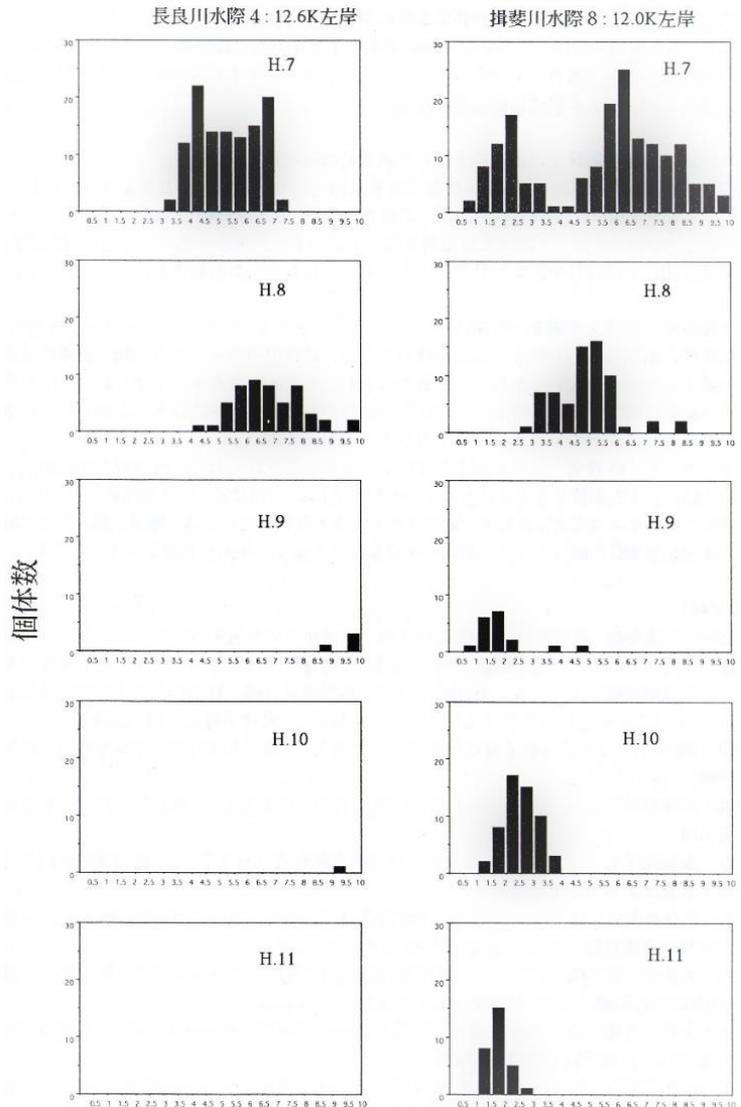


図3 河口堰運用後におけるベンケイガニ類の稚ガニ甲羅幅頻度分布
(建設省・水資源開発公団「長良川河口堰モニタリング年表」より作成)

同様の結果でした(図4. 図5)。

この結果から、ベンケイガニ類の稚ガニがいなくなったにもかかわらず、成体が見られるのは木曾川や揖斐川から侵入してくる個体がいるためと考えられました。

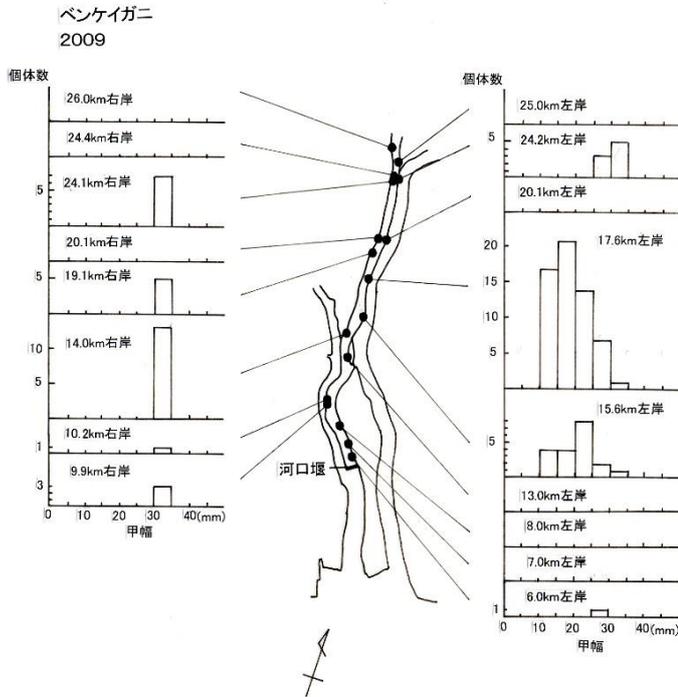


図4 長良川各地点のベンケイガニの甲幅別頻度分布 (2009年調査)

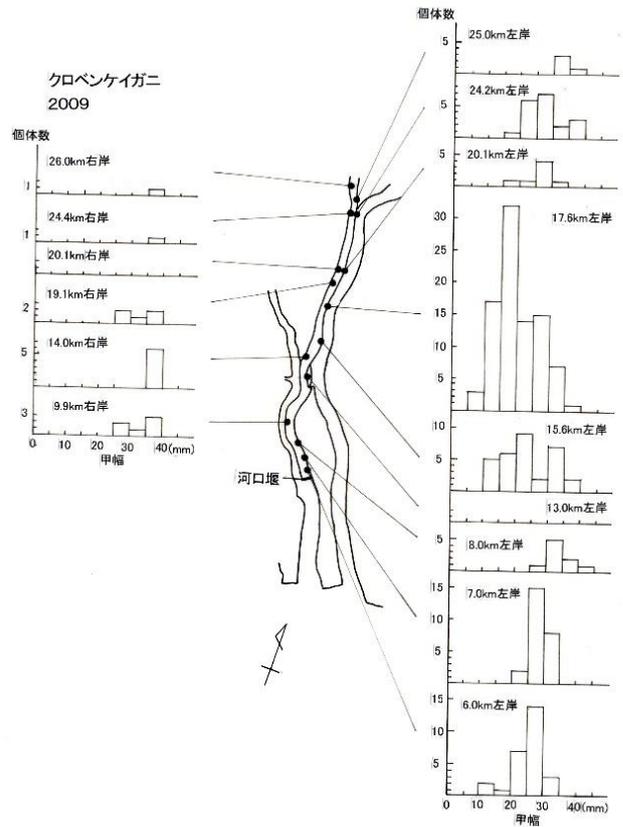


図5 長良川各地点のクロベンケイガニの甲幅別頻度分布 (2009年調査)

河口堰稼働後のベンケイガニ類の生息密度調査を、1991年に行った調査と同じ場所、同じ方法で2009年から2010年にかけて行いました。結果は、4地点中3地点が0、木曾川と接している調査地点で9.7個体/m²でした。この調査地点は、見つけ取り調査で多くの個体が確認された場所ですが、河口堰が稼働する前と比べて、およそ5分の1の密度になっていました(図6)。

離れた場所に生息する大型個体の謎

木曾川や揖斐川に隣接している場所では、ベンケイガニ類が長良川に侵入して来るため、稚ガニがいなくなっても成体が見られることがわかりました。では、木曾川や揖斐川から離れた場所に生息しているベンケイガニ類はどこから来たのでしょうか。2つの仮説が考えられました。1つは、河口堰が稼働する前からいたものの生き残りではないかというものです(生き残り説)。もう一つは隣接する場所から侵入したベンケイガニ類が、時間をかけて

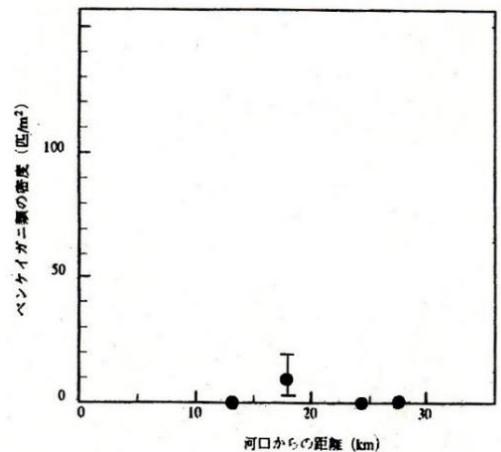


図6 堰運用から14年後のベンケイガニ類の個体数密度

そこまで移動してきたのではないかと思います(移動説)。

どちらの仮説が正しいのかを明らかにするために、2015年から2017年にかけて、2003年に行った調査と同じ方法で調査を行いました(現在報告書作成中)。その結果、木曾川や揖斐川から離れた場所では、2015年以降カニが採取されませんでした。このことから、離れた場所に生息していた個体は、河口堰が稼働する前からいた生き残りと考えられました。同時に、ベンケイガニ類の寿命は20年ほどだということもわかりました。

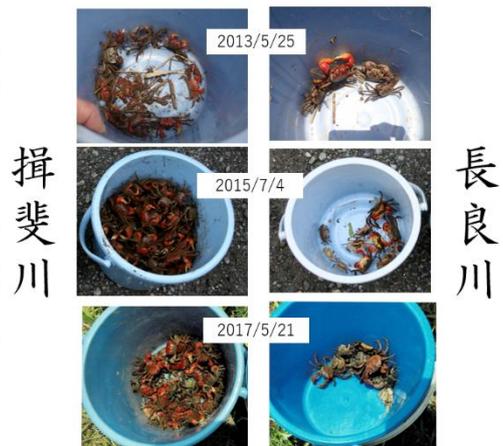
おわりに

このようにして、河口堰が稼働することによって下流域に生息していたベンケイガニ類にどのようなことが起きたのか、20年以上の地道な調査の積み重ねによって明らかになりました。

かつて長良川に生息していたおびただしい量のベンケイガニ類が果たしていた生態系での役割や、ベンケイガニ類がいなくなったことで生じた、長良川下流域やその下流の伊勢湾に与えた影響までは、残念ながら解明することはできませんでした。しかし、その大きさは計り知れないものがあると推察できます。今こそ河口堰によるメリット、デメリットを正しく見極めて今後の運用の見直しを考えてほしいと願っています。

よみがえれ長良川実行委員会は、生物多様性の日にちなんだ湿地のグリーンウエーブに参加し、千藤克彦先生の案内で「長良川下流域環境観察会」を毎年5月に開催しています。そこではカニの状況も観察しています。

興味がある方は、是非参加ください。
下は、昨年の観察会の様子です。



2018年5月27日

長良川・揖斐川背割り堤の河口から9.8 km地点に移動。午前10時30分より、長良川の岸边、揖斐川(左図)のヨシ原に同じ人が入りそれぞれ5分間「カニ採取」をした。
長良川(右)の岸边はオギに覆われ、柳などの樹木も多い。取れたカニは「アカテガニ」1匹だけ。
揖斐川(左)のヨシ原では、ベンケイガニ・クロベンケイガニが81匹(♂33・♀22・未判別26)採取された。



5/23 岐阜県要請行動

毎年、岐阜県知事あてに「長良川環境改善に関する要望書」を提出し、それに関して県土整備部河川課長、職員と話し合いを持ってきました。今年は5月23日に議事事務局の会議室で約1時間、以下の3項目について要請し意見交換を行いました。県側は井上河川課長をはじめ5名、よみがえれ長良川実行委員会からは11名が参加しました。



◆要望1 長良川環境改善と漁業の再建を図るため長良川河口堰開門調査に向けた取り組みを行うこと。

課長： 取り返しがつかない塩害による農業被害が起こらないよう、塩水を入れないフラッシュ操作の弾力的運用をしてもらうように今後も国にはお願いしていく。

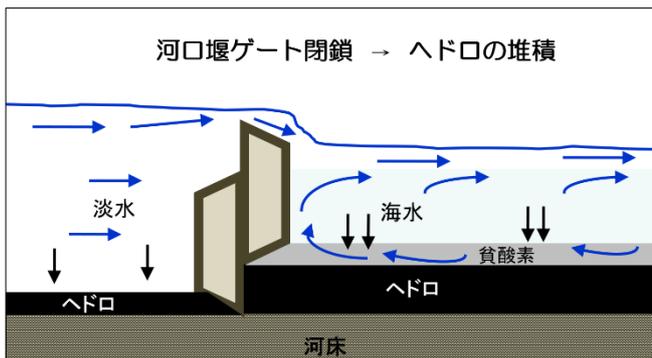
市民： 農業被害が出ないよう、10月から3月までの農業用水を取り入れない時期を選び、モニタリングをしながら慎重に調査できるのではないかと。もし万一問題が起こればゲートを閉鎖すればいいのではないかと。

課長： 土壌汚染の恐れがあるため、人為的な被害を起こす冒険はできない。

市民： 承水路などを設置するなど十分な対処はしているのではないかと。起こるかもしれない被害に配慮すると言われるが、実際起きている環境被害、漁業被害に配慮すべきではないのか。長年サツキマス漁をされてきた大橋兄弟の亮一さんが亡くなられて今年は弟の修さんが一人で漁をされているが、最盛期に1000匹、1500匹とれたのが去年は49匹。今年はまだもっと少なくなりそう。下流部ではヘドロが堆積し、ヤマトシジミは生息できなくなっている。

課長： 水質基準はクリアしているし、魚道でアユなども多数遡上しているのを確認している。ヘドロは洪水の際、ゲートを全開するので流されているのではないかと。

市民： ヘドロは堰の上流よりむしろ下流で堆積し、粘着質で洪水でも流されず2メートルくらいに厚くなっており、酸



素も届かず生物は生息できる状況ではなくなっている。河口堰建設前は我々も堰の下流でこれ程まで堆積するとは思わなかった。なぜ堆積するのか、(左図を示しながら) 堰があるため下流側では図のような流れが起きる。川からもたらされたプランクトンが海へ流下し、沈降し、逆流に乗って堰下流に堆積する。そしてヤマトシジミは絶滅した。ぜひ、岐阜県

民調査団でも現地を調査してほしい。私たちが毎年行う環境観察会に参加していただいてもいい。

市民： 郡上の実家は長い歴史のある宿屋をしているが、アユやサツキマスは減り。客にちゃんとした天然遡上鮎を出せず、このまま続けていけるかと苦悩している。

市民： 木曾三川ではシジミ漁は壊滅的な打撃を受けている。先日のニュースでは愛知県の業者が愛知県産ではないシジミを愛知県産と偽って売っていた産地偽装問題があった。(損をしてまで?) 偽装しなければならぬほど追い詰められているのではないか。環境改善のために開門調査をするよう岐阜県も提案してほしい。

課長： この事業は治水に役立っている。今年の洪水の際も水位が下がった。利水、治水などバランスを考えていく必要がある。

市民： 河口堰そのものは洪水、高潮、地震などにはかえって危険な構造物であることは洪水時にはゲートを全開することでも自明。必要な浚渫はすればいいと思う。堤防強化などで対処してほしい。

◆要望2 木曾川水系導水路事業の関係地方公共団体からなる検討の場において、長良川の環境悪化の危惧を表明し、「事業の中止」を表明すること。

課長： 平六潟水に見られるよう、近年の気候変動に伴う潟水のリスクに備えることが大切。利水だけでなく川の環境のためにも必要な事業だと考えている。

市民： 平六潟水の際、長良川流域で問題は起こってはいない。むしろ、潟水時に流量の少ない長良川に徳山ダムの冷水を流すことになれば環境に与える被害は甚大ではないか。冷水は川底を流れ2層化しヘドロが堆積するのではないか。まさに鵜飼をする大切な場所である。

課長： 水は流れの中で攪乱され混じるので影響は限定的だと聞いている。

市民： そもそも長良川に導水する必要性は何なのか。魚類の専門家をはじめ多くの人が環境に及ぼす影響などについて128項目の質問書を提出した。今でも県のHPに出てはいるが、それに対する回答は得ていないと思うがどうなっているのか。(参照:「木曾川水系連絡導水路事業に係る検討に寄せられた意見」及び「環境レポートに対する有識者からの意見」 HP: <http://pref.gifu.lg.jp/>)

課長： 潟水が起これば物作りの中心である中部の産業に大きなダメージを与えるため、水を統合運用することでそうしたリスクに備えることが大切だと考えている。現在、愛知県の宇連ダムの潟水が大きな問題になっている。

市民： 宇連ダムの潟水について言及されたが、東三河では他に大島ダムや多くの大きな調整池もあり、天竜川からの導水など様々な施策で対処していると聞いている。水資源機構の説明でもすぐに家庭の水が出なくなるわけではないと説明している。住民の心配を煽るような発言はどうかと思う。

市民： 岐阜県は、木曾川水系連絡導水路は必要であるといっています。その理由として東濃地区の潟水対策に有効だとの見解です。岐阜県は多治見を中心とした潟水対策として平成26年度に飛騨川から取水した東部送水路を完成させ給水をはじめています。数量の公表はありませんので実態は不明ですがこれにより東濃地区の潟水対策は県の河川行政の速い対応により問題はありません。ひよっとして起こるかもしれないひと時の水不足を理由に環境破壊の巨額工事をする余裕は今の国と岐阜県にはありません。

市民： 導水路建設には当初見込みで890億円かかると言われている。岐阜県の今年度予算は8259億円、土木費が824億円とのこと。それと同じ額に相当する。リスク論を展開されるが、私たちにとっては教育や福祉などがどうなるかも大きなリスクである。本当に必要なことに使ってほしいと思う。

市民： 県庁所在地の街中を流れている長良川を市民、県民が大切に思う気持ちは、愛知県民の私から見ると羨ましいほど。岐阜の大切な宝を大切にしていってほしいと思う。

市民： 生物多様性保護を目的とした COP10 が開催されて来年は 10 年。岐阜県は長良川が農業遺産登録され、清流長良川を謳っている。前回行われた導水路事業の関係地方公共団体からなる検討の場において、岐阜市は「環境に配慮するように」と言っているが、岐阜県はそうではない。検討の場において、岐阜県も長良川の環境悪化の危惧を表明し、「事業の中止」を表明してほしい。

◆要望3 ダムによらない伝統的防災施設施策の充実をはかり、内ヶ谷ダム建設事業の再検討を行い、工事を一時中止をすること。

課長： 内ヶ谷ダム建設は治水にとって必要な事業であり中止をすることは考えていない。

市民： 岐阜県の治水関係の予算はダム建設などに比べ年々減少し、本当に必要な堤防強化などに使われていないのではないかと。昨年の大洪水の後、長良川流域では河川工事が大々的に行われている。遊水池を守り増やすなど環境に配慮した河川行政を進めていっていただきたい。

◆参加者の感想

- * 長良川河口堰問題、導水路問題についての井上課長の発言は、建設省、国土交通省が長年述べてきた見解と全く変わることがないばかりか、裁判などでもそこまでは言わなかったこと、例えば「統合運用には必要な事業だ」など、をためらわず言うのけることに国の本心を改めて感じさせられた。
- * 課長は岐阜県の住民の代表というよりは、国の政策を推進するのが役割だと思っているのをひしひしと感じました。県民、市民の想いはどうすれば伝えられるのでしょうか。
- * どこかの国の総理大臣の国会答弁と同じようだな～と思いました。
- * 昨年は、交渉の場に環境悪化の象徴である現場で採取した「ヘドロ」を持参したが、課長は全く関心を示さなかった。今回やりとりする中で、洪水のときゲートを開けるから流れ去ると言いきる反論を聞いていて分かったことだが、彼は普通のダムの上流に貯まったヘドロを想定しているようで、教科書には出てこない河口堰下流側の現実を全く想像できない、いや、認めたくないようで、啞然としました。

10年にわたる私たちの観察会の「長良川と揖斐川の川底の比較データ」

(河口から4.0km)	揖斐川	長良川
2010/10/19	ORP +160mV	ORP -402mV
2011/6/25	ORP +170mV	ORP -359mV
2012/9/5	ORP +156mV	ORP -352mV
2014/5/25	ORP +126mV	ORP -226mV
2015/7/4	ORP +243mV	ORP -208mV
2016/5/22	ORP +222mV	ORP -227mV
2017/5/21	ORP +178mV	ORP -235mV
2018/5/27	ORP +227mV	ORP -350mV

私たちは毎年、環境観察会で河口堰下流側約 1.5km 地点の長良川と揖斐川の川底の砂・ヘドロを調査し比較しています。

堰のある長良川は酸化還元電位 (ORP) がいつもマイナスの還元状態のヘドロ。これではヤマトシジミは生息できません。

事務局から

- ◆ 私は今年俳句教室に通っています。先生は美しい日本語と季語を貴ぶ人で、毎回数句を提出しますが、私が良いと思う句は採用されません。その中でフランスでのサミットを詠んだ「地の果てに愚者集まりて夏ゆきぬ」があります。我論を振り回すために、世界の民がせっかく築いた景気が去ってゆきます。外交が得意な我が首相は世界を飛び歩きますが、そのたびに日本への尊敬の念と地位が落ちてゆきます。

但し一つ金字塔があります。日本の借金は2018年度末で1103兆円を超えました。ダントツ世界一です。戦後の溜まった借金を彼はたった5年で200兆円積み上げました。新記録です。温暖化を理由に「的外れの」木曾川水系導水路事業を含む国土強靱化計画を進めます。日本は激減する人口の中で今、金はどこに使うのか？ 政治は金の使い方を、私たちは政治そのものを、考え直すときです。(粕谷豊樹)

- ◆ 本の整理をしていたらかつて読んだ「だまされること責任」佐高信×魚住昭(平成20年5月角川文庫版)が本棚の隅からでてきた。「だまされること自体が悪である」という帯につられ、つい片付けを後回しにして読み返すことになった。読み直した後「だまされること」を「無関心であること」に置き換えてみたら、今の長良川の状況にピッタリと当てはまるのではないかと思った。「無関心であること責任」である。

このところ岐阜市内の長良川の工事現場を見に行く機会が多かった。流れも河原も変えられて生物の多様性など考えられず、ただ雨水を効率的に流すだけの用水にされようとしている。でもこのことには県も市も、もちろん住民の多くの方も関心が無い様子。こうした無関心が続けば、気がつかない間に多額の税金が使われ、長良川に揖斐川のダムの貯め水が流れているという状況になるのではないか。将来的には長良川が長良川でなくなるのではないか。そしてその責任は私たち長良川流域に住む者がとることになる。私はその責任の重さを背負うだけの自信がないので、あらためて長良川への関心を持ち続けたいと思った。(堀 敏弘)

- ◆ 長崎県が建設を進める石木ダム。数々のダメダムの中でも、一段と無意味で有害なダムだ。そのダメダム建設を強行するために強制収用という手段が執られている。11月18日には、13世帯50余人が暮らす家屋の明け渡し期限が来る。法的には行政代執行(家屋を強制的に取り壊すこと)も可能になってしまふのだ。絶対に行政代執行を許してはならない。石木ダム建設、断固中止！(近藤ゆり子)
- ◆ 今年は暑い日が多かったですね。ある方が「9月は夏だ」と仰っていました。気候の変動が起きてきて、かなりはっきりと感じるが多くなりました。そして、先日は大型の台風による災害も起きています。母親が「伊勢湾台風もこうやった」と少しだけ話してくれました。災害のみならず自然そのものも、次の世代にきちんとした形で引き継ぎたいと思います。(中川敦詞)

- ◆ 私は、絵だより(絵と言葉をハガキに書く)を十年ほど習っています。絵は水墨画手法が基本で、先生は書家ですから文字にも鋭いチェックが入ります。どちらも難しく嫌になることも度々ありましたが、今では自分の力量も自覚できたのでその地点から一步、いえ半歩でも進めたら・・・と思って取り組んでいます。

描いても、描いても、描いても、描いても何十枚ハガキを無駄にしても気に入った物は描けません。なんとか妥協して絵は挙っても、次は文字入れ、絵と同様にじみとかすれが重要！墨量、字の大小等々……。イイナ！と思う作品は、大胆な絵と、ドッキリの言葉。私のこれからの課題です。
とぼけたこと書いてすみません。（岡久米子）

- ◆ 岐阜市議会の過去の議事録（会議録ライブラリ）があることを知り、河口堰問題が山場を迎えていた平成2年第4回定例会の記録を読み返しました。当時議会では、現在も問題になっている浚渫や、洪水対策、鵜飼のあり方、アユなど漁業や環境への影響について、故松尾孝和さんをはじめ議員たちと市長や市当局の間で真剣な議論がされていました。当時すでに、千鳥橋下流から長良橋までの区間でも砂利が堆積し、アユなど魚の大切なすみかである淵も姿を消し、鵜飼の舞台の自然環境が大きく変わってしまっていると発言されています。それからすでに30年。現在の状況をきちんと知り、未来を考えるための、私たちへの伝言だと思います。（田中万寿）

お知らせとお願い

2007年12月に私たちが長良川へ徳山ダムの水を放流する計画を知り、会を結成してから12年が過ぎました。河口堰建設で甚大な影響を受けた長良川に徳山ダムの水を放流することになれば、長良川は取り返しのつかない悲惨な状況になるのではと思いました。

当初2015年完成予定だった導水路計画は、民主党政権下でダム見直しの一つになり、現在まで凍結になっています。国の事業で残された最後の「検証中」事業です。計画はいつ動き出すかは予断を許さない状況です。

この間、みなさまには物心両面で支えていただき、本当にありがとうございました。私たちが年々重ねてきていますが、長良川がこれ以上悪い状態にならないよう、少しでも改善するよう、諦めず、微力ながら活動をしていこうと思っています。これからもよろしく願いいたします。

今回は11月9日に開催される愛知県の長良川河口堰最適運用委員会主催の県民講座のチラシを同封いたしました。河口堰開門に向けて前進するオランダと韓国から講師を招き学習します。ぜひご参加ください。

「よみがえれ長良川」実行委員会に参加している団体の一つの「河口堰に反対し、長良川を守る岐阜県民の会」は河口堰のゲート開放を！という署名を集め、毎年、一年間に集めた署名を携えて国会請願をしています。お一人分でも構いませんので署名をして県民の会宛にお送りください。足りない場合はコピーしていただければと思います。ご協力をお願いいたします。

このニュースは、私たちの行なった集会などにご参加いただいた方、署名活動で協力いただいた方、講師などにご協力いただいた方などにお送りしております。

「振り込み用紙」を毎回同封させていただいておりますが、私たちの会は会費制ではありませんので、お気持ちがある時にお使ください。



「よみがえれ長良川」実行委員会の参加団体を紹介しています。第7回は、東海圏で活動を展開されている、「名古屋市水辺研究会」さんです。

参加団体紹介 7

名古屋市水辺研究会

代表 國村 恵子

本会の目的は、水辺の動植物と生態系に幅広い流域住民が親しみ、学ぶ機会を提供するとともに、水源涵養林となる森林帯から里山、湿地、河川を経て沿岸域に至る流域単位の自然生態系を、希少野生動植物の保護を含めて調査し、水辺環境の保全と改善に向けて、流域住民とともに適切な対策が図られるよう関係機関に働きかけることを目的とする。と定款第三条に定めています。

主な事業として、各種水辺ガイドマップの作成、学校教育総合学習支援事業、水辺の環境教育リーダー育成事業、河川調査とモニタリング事業、行政・地域・大学などとの協働事業があります。毎年、親子を対象とした各種観察会、無農薬・手作業の田んぼの学校、庄内川・香流川・戸田川・山崎川・木曾川・都田川流域などでの水辺教室も開催しています。

2019年11月17日には、当会と交流する愛知・川の会主催の清流長良川エクスカージョンを実施し、霞堤、畳堤など伝統的防災施設を見学しつつ、河道変遷、長良川流域特有の歴史文化、未来に向けた治水のあり方も考える事業を予定しています

* 名古屋市水辺研究会「長良川エクスカージョン」のご案内

11月17日(日) 午前8時50分 JR大曽根駅北改札口集合後、マイクロバスで9時出発、昼食持参。参加費 2000円。
申込は水辺研究会のメール mizube@axel.ocn.ne.jp へ、または、氏名・住所・電話番号を書いて052-795-8932へFAX。
定員に達して参加不可の場合のみ連絡します。主なコース:板取川長瀬橋で清流に触れ、車中から中組・下渡橋下流の遊水池機能を見て、鶺鴒ミュージアム周辺で昼食、岐阜大学富樫先生の案内で川原町歩き・閘門も含めて、畳堤を見学、鮎の瀬大橋兩岸の池尻遊水池・霞堤を見学、大曽根帰着午後5時。

ご参加ください

11月9日(土) 県民講座「河口堰開門の世界の先進事例を学ぶ」

13:30~愛知大学名古屋キャンパス講義棟3F L305 講義室

11月14日(木) 第二次設楽ダム裁判口頭弁論 名古屋地裁前集合 10:30

11月17日(日) 石木ダム問題全国集会 13:00~長崎県川棚町公民館

12月14日(日) さよなら原発ぎふパレード 10:30~清水緑地公園(JR岐阜駅南)

12月14日(日) 四日市の水道を考えるシンポジウム 13:20~四日市市民交流会館本町プラザ1階ホール



発行：長良川市民学習会

<http://dousui.org/>

代表: 粕谷志郎

連絡先: 武藤 仁 / 090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

- 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会

本ニュースのバックナンバーは <http://dousui.org/news/index.html> でご覧になれます。